

愛着スタイルとレジリエンスが攻撃性に与える影響

三 島 碧

厚生労働省による、令和2年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数の発表によれば、令和元年度と比較して、5.8%増加していることが報告されている。虐待の被害者に対する研究も盛んにおこなわれており、虐待のリスク要因について、寺井（2018）は親の要因について、「親の性質」などがあると報告している。この親の性質の点について、愛着スタイルの要因と情動制御の観点から坂上・菅沼（2001）が検討しており、安定した愛着傾向を持つ人ほど情動に対して比較的自由に意識を向けることができると示している。愛着の特徴から尾崎・杉本（2007）は、回避性の高い愛着傾向を持つ人について攻撃性が高く、身体的攻撃を相手に加える傾向があると報告している。この事から虐待と愛着には関係があることが示唆されている。一方で、リスク要因が親側にあったとしても、Wolfe（1999）の提唱する補填因子という、社会的に支援を受けていること、親が児童期に受けた虐待や、問題について語ることができるといった特徴があれば虐待を回避できるとも考えられる。そして、この概念は、レジリエンスの概念とも共通する部分が存在すると言える。レジリエンスとは、平野（2017）によれば、心理的な傷つきや落ち込みから立ち直る回復力のことであり、補填因子として機能している可能性があるとしている。

本研究は、大学生に対し、愛着スタイルにおける安定性、両価性、回避性の三つ、およびレジリエンスにおける質的要因と獲得的要因の二つが暴力的行動の背景となる攻撃性にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。本研究の結果が明らかになることで、多数あるレジリエンス概念の中、どのような側面が攻撃性に作用しているかを明確にできると共に、攻撃性の要因として想定される愛着がどう攻撃性に影響するのかを検討することができると考えている。近畿圏内の私立大学の大学生・大学院生256人を対象にweb調査を実施した。有効回答数は254名であった。うち男性135名、女性119名、その他2名であった。平均年齢は19.91歳であり、 $SD=1.86$ であった。

結果は、質的レジリエンス要因の社交性と行動力の傾向が高ければ、攻撃性のなかでも敵意が低くなることが判明した。また、行動力以外のレジリエンス、すなわち社交性、楽観性、問題解決志向、が高ければ、言語的攻撃を高めることが判明した。愛着スタイルでは、安定性が高ければ、攻撃性のなかでは短気、敵意、言語的攻撃が高まることが判明した。また、同じく愛着スタイルのなかで両価性が高い場合、短気、敵意が高まることが分かった。本研究の課題として、レジリエンスを獲得している個人は、幾つかの攻撃性が下がる結果が示された。虐待の抑止の面から、レジリエンスについてさらに検討することが望まれる。